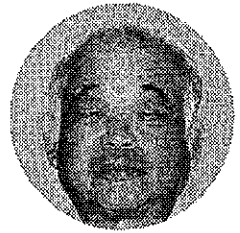


中経 論壇

経営支援NPOクラブ監事
山口 浩利



昭和38年に大学を出て、造船機メーカーに就職し、石化プラントの輸出で東欧、ソ連、中国、東南アジアから近東、米国など各国を経験した。この間、起用したメード・イン・ジャパンの機材(機械、電機、計装品)の品質の高さと納期の正確さは、大きな誇りであった。

他方、円の独歩高(360円〜80円/ドル)3〜4倍の強さ()の暴遷の中で、日本の

製造業は、組織ぐるみでTQC(トータル・クオリティ・コントロール)活動を推進展開して、品質の維持とさらなる向上をはかり、同時に価格競争にも打ち勝って今日がある。

しかし、数年前に企業の不正行為が、その企業の従業員や関係者の内部告発によって次々に明るみに出た。食品の品質や表示の偽装、メーカーや工事会社のデータの不足や改ざん、無資格者の検査代行結果としてのリコール隠し、マンシヨンの倒壊危機、不正会計報告からの信用失墜等

最近の不祥事に思う

々、企業の規模を問

わらず多分野にわたる。一体日本のTQCはどうなってしまうのか、と世間は驚いたものである。ところが悲しいこと

とに、その時膿を出しきれなかった大手企業が未だ残っていたのだ。日本を代表するN自動車もK製綱も、個人が自分に嘘をつき(つかさ

れ)、組織として会社を、また会社として顧客や世間を、欺いたわけである。このことは、海外顧客の日本人観を変え信頼を失墜させた。いったん失った信頼の回復は至難の業であ

る。私は企業を卒業して、平成14年にNPO組織に入会し、中小企業の皆さんの販路拡大のお手伝いや事業計画策定のご相談に与かっている。こうした活動を行う中で、私自身、大手メーカーの一部に、一ある種の緩みや中小企業に対する傲慢さ、リスク回避の名目での責任回避、丸投げお任せ方式等々」を感じることがある。

こうした違和感の基が、今回のような不祥事を生んでいるのではないか。大半の社員にとっては青天の霹靂(へんげき)であろうが、連座した関係者は、総懺悔(ざんげ)をして原点に戻り、マイナスからの出直しをしてほしいものである。そして、まだ残っているのでは? との疑念を完全に払しょくするためには、社員個人が日本人の義務として、内部告発に踏み切る勇気をもつ以外、道はないのではないか。

日本のTQCはもういなく